

実子死別の後は再び実子に恵まれなかつたご夫妻は、みゆきさんの弟さんを養子に迎え、家業は発展し家族運にも恵まれていった。

ただご主人が病床に就いて八年間、みゆきさんやご養子夫妻の手厚い看護を喜びながら他界された。

その後のみゆきさんは、再び満蒙の地を訪れ開拓当時の現地の旧知の人々との親善に努めたり、現地に死没された方々の供養塔の建立や、残留孤児の発見や、肉親捜し、帰国後の就職や生活相談など、八面六臂の活動は多くの人々の感動と感謝の的となつた。

亡きご主人や弟さんや幼な子の供養にと、信仰の道を究め真言宗の得度を受け僧籍を得て、満蒙の地を訪れた際に持ち帰つた土を埋めて慰霊碑を建立して、同志の供養や同好者の寺院めぐり、聖地めぐりのツアーの世話や老人ホームでの看護など、その活動は七十一歳の老いを感じさせない、多くの人の驚きと敬愛を集めている。

(岐阜県引揚者団体連合会)

養老郡支部長 安田 高

引揚げ作戦の舞台裏

岐阜県 古路 喜一

昭和八年ごろ、第二師団司令部に軍属として勤務していた父が退職し、奉天市鉄西にある満州麦酒(株)に就職、十年に仙台と奉天との二重生活に別れを告げ、家族で渡満した。

母は下関を離れるとき、再び本土の土は踏めないかもしれないと思うと、あふれる涙でトラップを濡らしたとか。

私の就学については、学齢は三年生程度であるが、無就学とあつて一年に編入ときまり弥生小学校の生徒となつたが、学業は適当、宿題はやらぬと決め、学校帰りは寄り道をして露店商と対話、三カ月で片言、六カ月で子供語りができるようになり、ますます楽しい毎日であつた。

昭和十五年奉天商業に入学したが、十八年のある日、

両親に突然呼び出しがあり、推薦するから是非志願するように言われ、政府軍の特務教育隊に入ることになった。

傾斜のきつい川岸を一気に駆け下りる。これで何度目か、その都度気がついたことを本部と折衝しては手を加え、つなぎつなぎながらも、どうにか受入れの態勢が整い、対岸からの一便の到着を待った。はやる気持ちを抑えながら幾度対岸に足を運んだことか、渡し船を安全に訓練どおりに手際よく、また混乱なく運べるであろうか、何か手落ちや手抜きがないかと、不安は昨夜来、頭の中で渦を巻いている。川面は薄く濁り、これらの川は喜びも悲しみも、古代より今日に至るまですべてを濁りの中にのみこんで、これからもさり気なく悠久の流れとなり過ぎ去ってゆくであろう。この川は第二松花江と言い、本流はハルビン市を流れていて、その支流にあたる。ここを滿鉄浜京線が走っている。川を挟んで両側に鉄道の駅があり、北は陶頼昭、南は松花江と言う。松花江の駅側から東の方を見ると、

鉄橋は中ほどから、くの字に折れ川底に突っ込み、見るも哀れな姿をさらしている。若者がこの鉄橋を伝って猿ながらに渡ろうものなら、対岸の監視哨が「来るな、来るな」と大声で制止し、続いて一発の威嚇発射戻ってこないといふ発目、橋の上から川の中へ「ジャツポン」で終わりとなる。ここが内戦中の双方対峙する境界線でもある。蒋介石の率いる政府軍（中央軍）に對し、毛沢東の人民解放軍（八路軍）が互いに覇を競い、内戦中であつた。アメリカの軍事調停委員会（三輪委員会）の調停に基づき、邦人引揚げ送還を行う間、ここを安全保証地域と定めた上、互いに送還を義務づけ支援を行うことになっているが、何といつても戦後荒削りの軍の再編におおわらわ。自軍のことで精一杯というのが本音、双方とも招かれずに上がり込んだ日本人などに、かかわっていられないのが現実である。八路軍は長春（新京）を撤退しハルビンに後退する際、追撃を阻害しあるいは遲滞させる意図から、その間の橋梁の大小を問わずすべてを破壊し尽くし、念入りに陶頼昭からのレールを七・八キロメートル撤去したこ

とにより、引揚げ列車は途中で下車させられ、七・八月ごろの炎天下を、また、雨ともなれば満州のどしゃ降りの中を、若者のいない集団だけに、でこぼこ道をつまずきよろけては倒れ伏し、「遅れた者は置いて行くぞ」とどなられ、どなる人もよろけながら歩く。だれもが精一杯で助けたくても手を貸す余力の持ち合わせがない。悲しいが心の中で手を合わせ許しを乞いながら、うつむいて通り過ぎる。心が痛むがここは八路軍の支配下であり、政府軍は一切手出しができない。

もしも手出しをしたならば、ドンパチが始まること必死である。老齡者、嬰兒、幼兒を抱えた年若い婦人は、歯をくいしばり子を引きずり、泣く子を叱咤し手をあげ絶叫しながらの強行軍、母の強さ、本当に強い。外敵あらば石にでもかみつく氣迫に感動する。そして着いた川岸、ここが初めて政府軍の保護区となる。

対岸で待つこと二時間余り、予定時刻を過ぎたのに到着せず、渡し場の要員、若い兵士は待ちくたびれて、まだかまだかと私の顔をのぞく。私もいささか不安を隠しきれず、密行偵察にと、本部と打ち合わせている

と、「ちいら来た、ちいら来た」と兵士が叫ぶ。見ると、それは隊列どころかばらんばらんと途切れ途切れ、よろめき鳴き、一群がまとまるまで先端と後尾では差があり過ぎ、計画と現実の格差は私の考えの及ぶところではなかった。政府軍の兵士が操る渡し船に乗せては対岸へと反復、やつとたどり着いたのを抱き抱えて乗せ、着いたらまた手取り足取りと、政府軍の青年兵士は言葉こそ通じないが献身的な態度、重い荷物や弱った人を背負い運ぶ姿に接し、これが戦勝国の軍人だろうかと感動する。

受渡しの作戦が立案計画され、軍幹部が会し討議を尽くした上、軍參謀もこれを認め、よしそれで行こうと上申し、改めて軍長の決裁を待った。その時期は二十一年の麦秋のころと記憶する。

敗戦後しばらくの間、曆は私の周りから消えており、私生活に支障がなかったから不思議な日々だった。あした、あさって、しあさって、その先の約束などは保証がないからでもある。明日の保証は果たしてあるのか、満州のどでかい太陽が西の大地の果てに、ぐっぐ

つと沈み、今日はどうにかどうやら過ぎ、期待かあきらめか、明日は何とかなるさでやってきたのである。

徳恵駅舎の線路を挟んで向かい側に、中華民國の新編第一軍、軍長潘祐崑少将が最前線にいる。もちろん、軍司令部もここにある。軍長は兵を前に作戦の概要を示して、最後に一言付け加えた。「日本人々々は遠い昔、中国から文化を取り入れ、それをはるかに高い文化とし、男女小人すべての人が読み書きができる。優れた勤勉な民族である。物を奪ったり罵倒したりは、絶対に許さない。蔣總統は破れた日本の人に対し、『怨に報ゆるに徳を以つてす』と老子の言葉を引用された。良く意を呈し、是非ともそのように勤めよ。我が全軍の諸士は温かく接してほしい」と訓示、大変情け深い軍長である。応援の虎マークの青年遠征軍第二〇七師、三民主義青年団の兵上も、全く同じく親切に優しく、困ったときはお互い様だよと心の温まる態度に感服する。悪評の中、最たる者はと言うと日本人が教育した満軍、満警、小役人、仕事にあぶれた工人の類である。楽でいばって給与が良くて命の危なくない方へ、この

輩を雑軍と言った。これは今も昔もめんめんと続いている中国軍団の姿である。三国史以来のことで驚くに値しない。引揚げの記に登場する、「物出せ、金出せ、女出せ」は、総じてこの雑軍である。正規軍となると多少教育され、孫文を尊敬し、安心と皆が等しく食べられる国をと、すらすら言う。実は部類からすると、私も雑軍の類かもしれないが、こんな経緯から男つ気をだす羽目となったのである。

ソ連軍侵攻により、参戦、白城子方面に応戦し、後退し通遼付近にて部隊を解散する。ソ連医療部隊とともに、同行しグロテコボにて、モスクワ留学の時期を待つが果たせず、満州に戻る。その足で白菊陸軍官舎に赴く。のぞいて見るとおばさんばかり、お尋ねしても「さあね、分かりませんね、よそで聞いたら」とらちが明かぬ始末で、しばらくして坊やが神妙に差し出したメモを見ると、貴下は満映の杜宅を訪ねていくように」と所書きが添えてある。仕方なく今夜のねぐらのこともあつて出向いてみると、「おお来たか、掛けるよ」と、何のことはない、前に教えを受けた教官

である。退役の軍人であるが、謎の多いその道の専門家と聞いている。奥様は品のよい教養のある上海の方で、風呂を勧められ着衣を脱ぐと、禪は垢と脂で革のようになつてゐるではないか。股は埃と脂で苔のようで湯を掛けると泥水状に滴る。歩いて、転がり、ここまで来たんだ。野良犬だなあとしみじみ自覚した。風呂から上がると、ちょうど毛皮を脱いだようで乾くと皮膚がかさかさする。着ていたものは庭に捨ててあり、一式新品を羽織らせてくださった。清々しきことよ。老酒をいただきながらよもやま話が弾んだ。しばらくすると少し真顔になり、「どうだ一つ命を投げ出して、お役に立つて欲しいのだが、実は私に依頼があり、何とかお手伝いができるならと思つていたが、結核に侵されているらしく微熱が云々……。そこで貴君に何とか助けてもらえないだろうか」ざつとこのような要旨であつた。翌日早速、民団とか民会と呼んでゐるところの、日僑善後連絡総処に伴われ、高崎達之助とおつしやるえらい人にお目にかかり、非常に危険な仕事だが、欠くことのできない重要な任務、きつと貴方なら

と、多少の持ち上げもあつたに違いないが、日本男子だ、命を捨てる覚悟で事に当たると決意を新たにし、国から見捨てられた数多くの在留日本人のために働かせていただくならば、これも本懐であると私は心に決め、申し出を受けたのである。また別室に通され、次にえらい人に紹介され、ハルビン地区の引揚げに関する諸準備と同時に、状況の密行偵察、先方の民会の責任者との計画詳細の打合せ、組織と編成、更にチーム作り、落ちこぼれないようにリーダーを付ける。携行品の制限、健康管理、疫病対策、出発の優先順位、携行食糧などについて頭の中に要旨をしっかりと詰め込んで、徳恵の新一軍司令部に出頭する。教官婦人がしたためた書状を封のまま差し出すと、まもなく軍長閣下が接見するからと案内され、じゅうたんを敷きつめた二階の執務室に通され、いすを勧められた。お茶をすすりながら小一時間ほど話し込む。机上に先ほどの紹介状が広げたまま置いてあり、ふと目をやると毛筆で何一つ読めそうもない文字が書き連ねてゐるではないか。はてなと首を傾けるが分からない。分かるは

ずがない。軍長に何と書いてあるかとお尋ねしてみると、読めるなら呼んでみなど、笑いながら手渡してくださる。見事な筆づかい。楷書体であるが全部読めない記号である。そうして見ている中に、「あつ分かつた」とすらすら読みこなすと軍長は大変驚き喜ばれ、そうかそうかと手を差し出して改めての試問はいらないうと、私に「階級は上士だが、士官待遇で採用」と言われ、米軍の被服と装備が用意された。私は一年坊の始めの教育過程で、きちんと学んでいるから記号が読めたのである。

それである日突然、中国の兵士になれたのである。何を使い何を食べても無料だが、給金の支給はない。また請求されるものもない。軍は私を引揚げ作戦の首席連絡要員として大事に扱い、兵士も戦友として仲間としての冗談をとばすほどの親密さがみられた。このような危険と隣り合わせでしかも何の保証もない。給与もない。日本外務省の任命書も、依頼書もない。また私自身が是非この仕事をさせてくださいと言ったこともない。もちろん報酬を期待してのことでもない。

死んだらそれだけのこと。けがをしたらけがをしただけのこと。実に割り切って考えるしかない。いかなる勳章も賛辞もなく、ひたすら働ける自己満足は、何よりもすばらしくそう快である。

その当時は民団とか民会、難民への奉仕活動、医療奉仕、まだまだたくさん、今でいうボランティア活動があった。何しろ判然としているのは、する方される方、いずれもお金がなく、借りたとしても返済の保証すらたないのが実情で、頼む頼むのこの一手だけ、敗れた日本、何をしたくても占領下にある。「欲しがりません、負けたから」に変身しているのである。やがて特命を受け、早速全線をう回し、途中の各屯に立ち寄り、各長老や屯長にねんごろに単独引揚者の安全と救援を頼み、略奪や殺りくはすぐさま報復されるぞと、穏やかに脅して先へ進んだ。実は部落に入ると、至るところ戦利品が山をなしているのが、警告となつたのである。特に十九、二十、二十一号屯あたりの凄まじさたるや、約一年を経た今も路上、軒下に積まれている。

敗戦日、その直後の出来事。吉林省扶余県五家站到、来民開拓団という熊本県鹿本郡来民町の出身者で設立された入植地があった。団員二百七十一人が暴徒に次々と虐殺されたのです。団員のうち一人だけ外出していて判明したのです。屯民の仕業である。全滅は免れたものの、離散が孤児を生むといった悲劇となる無差別襲撃の恐ろしさを、想像してみてください。この地域を通ると、一族一部落ごとに赤れんがで城郭を巡らせた上、銃眼を設け、角々には望哨がある。堅牢なもので彼ら同志がある日突然相手を襲い、略奪殺りくを互いに繰り返すための設備投資なのである。途上観察し情報を集めては、ハルビンに向かう。

見通せる小高い丘陵には、五、六人のちんぴらどもがたむろし、追いはぎ、辻強盗といった無頼の徒がうろうろしている。帰路征伐をと十分観察して通り過ぎる。やがて足も痛みくたびれたころ、ハルビンに入る。隠れ家として、康生医院の桂木斯医大の医師にお世話になる。このときの民会長ナカタ氏と、開始される引揚げ輸送の件について十分な打合せを行い、すぐ計画

案を示して組織編成を促し、馬家溝の元陸軍病院にも出向、患者輸送の最優先と重患の対策を検討するが、問題点が多い。完べきな対策とならず、臨機応変にということにする。その当時八路军は医療に関しては何の準備もなく、邦人医師を徴用し、看護婦はもちろんのこと、娘さんにも不定期な留用を課し、医薬品、機材と、ソ連軍でさえ現在使用しているものはそのままにしたのに、貧亡八路军は骨までしゃぶる始末、あれもこれも対策に走り回るが、何一つ満足できるものはない。空しかったことが深く印象に残っている。あれこれと考えさせられる難問が随所にあり、一例をあげると、奥地からの丸裸の難民（略奪による）、栄養失調症に起因する歩行不能とか、視力障害といった方に接し、私がいかに無力であるかを痛感し、天を仰ぎ力を貸して欲しいとわめく愚かさでした。そのころの多くは、夫も息子も戦場へ、残るは妻子か老父母のみ、何で余力があるうか。我がことで精一杯が実情。最後の日、人民解放軍の分区支隊に行き支援を依頼するが、雑軍の空威張りにあって退散する。最後まで林

彪には会えずじまいとなった。雑軍八路は、かすめることに専念し、ゆすりは袖の下次第で、元のお役人は戦々競々の脅えた毎日、何と密告は摘発隊と称するやくざな日本人だとも言われていた。六日間の滞在中あれもこれも木枯らしが吹き始める前に、引揚げ作戦を完結したい。いかなる困難も乗り越え、これ以上の犠牲者を出してはと、その責任を強く感じた。尽きない対応に後ろ髪を引かれる思いで帰途につくが、連れて行つて欲しいと懇願された二人を、匪賊討伐を条件に伴い、武装を凝らした三人は、距離をとり農道を行く。チエコ小銃二丁、モーゼル特号を各自麻袋に放り込み、途中で襲撃の訓練と手はずを整え、銃の偏差矯正と試射、皆、それらの経験者だけに途中二箇所まで交戦制圧し、追いはぎやこれから始まる送還列車の襲撃の危険を避ける手段として排除効果を高めるために、地域に警告を発し、目には目をと、彼らなりに困敗れども、東洋鬼子はどっこいかみつくぞと思ひ知らせるに成功したようである。

長春の民会に状況を報告し、受入れの体制と計画の

見直しを勧め、徳恵の司令部に報告し、綿密な受入れと分担、だれが何を責任として果たすかを明確にし、例の記号で書き連ね、責任者に手渡し、ここから作戦開始となる。早朝から現場である第二松花江の川岸を選び、両岸に足場作り、土砂を入れ踏み固める作業と地ならし、傾斜勾配の道作りといった対応をし、架橋作業班は浮き橋を立案したが、不安定とか攻め渡られる危険とかで渡し船に決定し、早速船の改造に取り掛かる。船は工兵隊が使用する浮き橋用鉄船を四艘横に並べ、角材四本をロープで固く結ぶ仕掛け、安定性はよいがスピードは無視し、対岸に渡したロープを手繰り寄せての、往復を繰り返す単純なものだが故障知らず、へとへとになるまでの練習だが、兵たちは至って陽気な気軽さで本番の到来を待つ。

そして来るべき日がやって来たのである。陶頼昭の手前約八キロで列車から降ろされる。線路は撤去されてあるのでデコボコ道だけである。八路軍の領内とあって整地はおろか、立ち入りもままならず。これに体力の限界を超えた荷物、おむつも位牌も干飯も二升も

入る水筒とか、炎天下を、嬰兒から杖なしでは歩けぬ老人まで抱え、天を仰いでいかにせん。国府軍が足を踏み入れるとドンパチと、私は生まれて初めて地に伏して天地の神々に祈った。啓示をいただいたか、大車の導入に即応性ありと、一定期間雇い入れが可能かどうか、予算の問題と併せ八路軍が承諾するかどうか、その晩、早速長春の教官に相談すると、「工面してやるから」と出かけられ待たされる。居眠りしているところから、これで何とかせいやとばかり、状袋を一つ渡され、「へロだよ、へロインというやつだ」と知らされた。時価三万くらいかなあとにやりと笑って使い方を手解きしてくださった。それは満映のさるお方が、調達してくださったと聞く。回送便に乗りすぐ折り返し、翌朝陶頼昭の弁事処に、徳恵の高梁酒に砂糖を添えて親善を兼ね尋ねてみる。所長は俺だという男と話し込む。打ち解けたところで、大車を何とか都合して欲しい。その代償に相当の贈物をしたいと。その日の午後二台、翌日からは四・五台に増強されたが、それでも八キ口には変わらない。対岸に着いた母親の背の

嬰兒は、もはや息をしていない。顔は後ろにのけ反り口を開いたまま、息絶えている。その母の背から下ろしたが、どうしても抱き抱えた手から放そうとしない。大車の上から若い母の名を呼ぶが反応はない。そのまま倒れかけたとき、兵士が数人で抱えて車上に送り出す。私は空の弾薬箱に紙を敷き、小高い丘の裾に葬りました。そのお母さんに五十年目の今、懇ろに葬ったことをお知らせいたします。

ハルビンからの輸送貨車の機関士の計画的ないやがらせがあつた。車軸が焼けつきそうだと称し、何度も停止し、その都度石けんを差し出させる。これを使つて滑りを良くする云々。石けん奪いに続き、お金を出させると言つた数々の悪行に、運行の遅滞で受入れ側の混乱と運行回数が減少。これはハルビン駅頭で乗車待ち時間の苦痛や、持ち荷の略奪の危険、運行回数増加の期待に反する罪科。私は遅延遅滞の責任を問われる始末に当惑し、機関士を始末したとしても、次の機関士もより以上の悪かも、その保証もない。これには困つた。本当にまいつた。ハルビンの秋林洋行の支配

人がお困りのときは知らせてくださいと、何度か言っていたことをふっと思い出して、危険だが決心し覚悟した上、ハルビンへ直行し、頼んでみる。「やってみるさ、うまく行くさ」との軽い返事ながら結果を見守ったところが、その後はこっそり小銭をせびる程度になり、問題の運行は回数増加こそないが減少の最悪事態は免れた。

また、ハルビン駅頭での出来事。引揚者が集結し、手荷物携行品の検査を保安官気取りの小娘たちが、かき回しては抜き取るといった所業、保安官でもなく、関税官にもあらず、チンピラ小娘なのである。奪う物を手で抑え応じないと足蹴にされ、打撲外傷といった過酷な扱いとなる。あらかじめ不許可品目の明示もなく、制限品目の正式通達もなまま勝手に抜き取り着服といった呆れはてた毎日、自分の欲しいものを欲しいだけ、後は雑軍八路と山分けとくる。

この問題を徳恵の町で回教の菜館を営み、学塾を娘さんに、自身は専ら紅十字会の世話人を勤め、周辺にも讃えられる人格者に何とかして欲しいとお頼みした

ところ、仲間の紅十字会の長老に探りを入れていただき、公安関係の親玉に取り次いでもらい、民会の裏口から純金の延べ板を貢ぐこととし、一件落着となった。提供者は商社の経営者夫人とか、いざというとき、人肌脱いでくださった方々に、心から感謝いたします。

今度は徳恵の軍司令部から、長春以南での進行が遅滞している気配、詰まってくると受入れ設備のないこの地にたまる危険があると思つてらしい。可及的速やかに調査と是止措置を取つて欲しいので、「すぐ対処してくれ。旅券は瀋陽でもらつてくれ、連絡してあるから」とのこと、満州国内で当時働いている方は無給の方々ばかりで、意気に感じ、体を張つて、冥土で恩賞を授かればよいと思う人ばかり。私は独り身であるから、風まかせ、おだてられると英雄の気にもなる勇ましさ。私は途中長春に寄り、下調べをしてみるが要領が得られない。問題は流れが日に日に悪化しつつあること。長春緑園の難民収容所は満杯ときている。満杯は余計なもの発生源ともなる。コレラ、チフス、赤痢、栄養失調症と最後は食糧不足である。難民向け

の食糧の確保、医薬品を手に入れるお金はというと、借入れ金とか邦人からのとか、国民政府とか、あれよあれよというまにインフレも進むし、停滞はすべてを食む結果を生む。

瀋陽に立ち寄り、旅券を得るために東北保安司令長官部に向く。杜長官発行の証明書を懐に周りを見回すと、ここには政府軍の名を騙る雑軍ばかりに驚く。

周辺の朝鮮系住民と思しき輩がびかびかの軍帽を被り、やたらに威張り散らし、付近の人に尋ねると幹部と組んで利権漁りに明け暮れているという。ここにも歴然と腐った軍政があり、東北行営司令部も等しく、許可申請は袖の下次第、引揚げ支援が上の空となるはずである。私の目的は速やかに無事送還を果たすことにある。壺盧島での乗船待ちの状態と進捗をつぶさに調べた上、管理司令に会って聴取するが、理由は船腹の不足である。上陸地点の受入れも合理的なもの、個々の船が小さいものも運行しているが、借り物の船（リバティ・LST・駆逐艦）で賄っている。問題は船内で疫病が発生すると、船内が隔離病舎となり一週間とか

十日、半月と日数がかかりすぎ、船腹不足の際の落とし穴となる。南方方面からの帰還も北方方面も、帰って来る人は同じに見えるが、満州の冬は難民にとっては死が持ち構えているのと同じだ。精神力では氷は溶けないと嘆願し、哀願しては、関係先（佐世保、博多）

に訴えて回り、再び壺盧島で疫病と船腹の関係を説き、患者と看護人を残して松花江に帰り、仮設橋梁の保安点検と手入れに従事し、この積木橋であの満鉄機関車を支え、徐行に徐行、転落しなかつたのが大奇跡といえよう。渡る前に見ていたらと思うと、冷汗と同時に足の硬直を覚える。送還も八割方達成したころ涼しさが増し、私は髪の毛、爪も潘祐崑軍長に託して落ち穂拾いの旅に出るが、寒さと治安の悪化のなか、一カ月余りで三十七人を捜し出し、引揚げラインに乗せ帰国にこぎつけることができた。私の所属している国府軍新編一軍の兵士の大半が、中国最南端の雲南出身であり、言語は南方語のため東北省の生活になじめず、特に対人関係は習慣の違いなどもあって、軍政支配に効果を期待できず、衰退の兆しが見えてきた。年明けを

待つて日本の占領環境を確かめた上、身の振り方を考えることとし、四月ごろ日本本土である佐世保港に上陸。米軍施設に二十日余り逗留し、兵用バックいっぱいの贈り物を詰め込み、日当として三十ドルの大枚を支給され、だぶだぶのお古の背広を着こんで引揚援護局へ足を運んだ。

【執筆者の横顔】

古路さんは昭和三年仙台で生まれたが、父に第二師団軍属として渡満、その後退職し、奉天の麦酒会社で勤務することになったので、昭和十年、家族全員で渡満。小学校に入り、十五年奉天商業学校に進学した。奉天商業一・二年のころ、放課後満人露店商の所に立寄り満州語を習得していた。

昭和十八年のある日学校より突然両親に呼び出しがあり、その満州語を生かすために学校から推薦するが志願兵に進まないかと説得され、学業半ばであったが応じ、特務教育隊に入隊錬成中であつた。

戦後、ソ連進攻の際一時ソ連軍と共にシベリアに行

つたが、間もなく満州に戻り、昭和二十一年春、中華民國新編第一軍に在籍しハルビン地区日僑難民送還業務の工作員として裏作業を推進した。一般引揚者がいかにして、一日も早く引き揚げられるか、引揚げ道中のトラブルに腹を立てていたが、その裏で引揚げ業務を円滑に進めるために古路さんたちが日夜東奔西走並々ならぬ努力があつたことを知らされた。

(社)岐阜県引揚者団体連合会

理事長 川村 一正

岐阜県送出第七次満蒙開拓

青少年義勇軍

田中中隊の一員として

愛知県 林 修 三(旧姓三宅)

ハルビン訓練所

昭和十九年(一九四四年)六月、満州の遅い春も一足飛びに夏が来て、渡満二度目の種まきや植え付けも